

被災地のタブーにまじめに挑んだ
東北学院大・工藤優花さんの卒論が大反響
宮城・石巻のタクシー運転手に聞いてみると……

「震災から3か月くらいかな。記憶を見ればはっきりするけど、切戻ったまま深夜に石巻駅で待機してたら真冬のぶっかぶかのコートに着

タクシーの運転手が後部座席を振り返ると、乗せたはずのお客さんが消えていた。よくある怪談話のパターンだが、被災地のそれは結末がだいぶ違う。

た女の人が乗ってきてね」東北学院大学1年の工藤優花さん(22)が卒業論文のテーマに選んだのは、「被災地のタクシードライバーの幽霊現象」だった。冒頭の証言は、工藤さんが約1年かけて運転手から聞き取った体験談のひとつ。タクシーに乗り込んだ30代くらいの女の人は、運転手に「南浜まで」と告げた。「あそこはもうほとんど更地ですけど、かまいませんか? どうして南浜まで? コートは暑くないですか?

なぜ幽霊は



JR石巻駅前のタクシー乗り場。工藤さんの研究姿勢に好意的な意見が目立った



卒論をまとめた工藤優花さん。被災地防衛隊の活動にも参加している

そうする運転手に対し、「私は死んだのですか」と震える声で返したという。驚いた運転手が「え?」とミラー越しに後部座席を見る。別の運転手は、真夏の深夜にコートやマフラーをした小学生くらいの女の子を乗せた。自宅に着くと「おじちゃんありがと」と言っておじやんと消えた。降りるとき、確かに手に触れたという。なぜか若い乗客ばかり。ほかにも幽霊とは思わず実車のメーターを回し、自腹を切った運転手もいる。

宮城県石巻市によると、太平洋沿岸部に広がる同市では、東日本大震災による直接死・間接死と行方不明者を合わせると3071人を数える。工藤さんはその中心部のJR石巻駅に毎週通い、客待ちするタクシー運転手100人以上に幽霊の話聞いて回った。

被害の大きかった地域であり、当然、震災で身内を亡くした運転手もいる。工藤さんに霊感はない。被災地・宮城県にある東北学院大学の金釜清教授(地域構想学科)のゼミで学び、被災地の死生観についてまじめに突きつめた。しかし、現実には女子大生が「幽霊を……」と話しかけてもなかなか相手にされず、「面白おかしくネタにするな」などと怒鳴られた。目の前で泣かれたこともあった。それでも7人が不思議な体験を話してくれた。

「彼女は調査中、4、5回はやめる」と言いました。就職活動をしなくちゃいけないとか言って。そのたびに、絶対いい研究になるからうっとうしかったです(金釜教授)。ゼミ仲間も「慰霊碑」「震

タクシードライバーに 乗ったのが

この世と
あの世と
つながる

霊が立っているらしい。霊感の強い人は昼間でも見えるって(前代の男性運転手)「自分で死んだことに気づいていない幽霊が沼の縁に現れる」(前代の男性運転手)40代の男性運転手の家内が南浜町に向かった。

「震災翌日、火の粉と煙で空爆されたみたいだった。身内をここで亡くしたので、どうしても来なくなる。でも来る」と具合が悪くなる。と運転手。旧北上川にかかる日和大橋に向かった。大きなアーチが

かかった高さのある橋だ。「震災時は大渋滞して、津波がきたとき橋の上に止まっていた車だけ助かったという。高い橋なので津波をかぶらなかつた。それで橋に登ろうとしたら、幽霊が出るようになって、一時、夜間通行止めになりました」別の橋では乗客から、「この橋は幽霊が集団で登って来るから渡らないでくれ」と頼まれたこともあるという。

幽霊を乗せたタクシー運転手から話を聞くことはできなかった。しかし、幽霊を「霊さん」と呼んだり、「さまようのもわかる」などと理解を示す運転手が多かった。

工藤さんが聞き取りした運転手は「幽霊が出たら、また乗せるし、普通のお客さんと同じ扱いをする」と話した。なぜ、石巻のタクシー運転手は幽霊に畏敬を感じるのか。工藤さんは考察する。

「ドア・トウ・ドアの役割を担い、震災を理解し、同僚の



タクシードライバーの乗客が「幽霊が集団で登る」と恐れた石巻市内の橋(上)と夕暮れの南浜町(右)

地域愛があるから」タクシードライバーは客を選ばず、個室空間でこゝへでも連れて行ってくれる。

大切な人もう一度会いたい。夢でも幽霊でもいい。この世では、2度と会えない人とそうやって会おうとする大切な人と会う夢を見ること。ができた朝は、夢から覚めても満足感が残ったりする。あの世でも、それはきっと同じだ



「被災地の死生観について論議を始めたのは、この世とあの世とつながる」というテーマで、自らも被災者の卒業生を取材